

山添村古文書調査だより

奈良大学文学部史学科研究チームと山添村教育委員会による共同調査・研究

2025年8月21日（木）～22日（金）の2日間にあたって、山添村教育委員会のご協力で古文書調査を実施することができました。奈良県山辺郡山添村での古文書調査は、今回で21回目となりました。

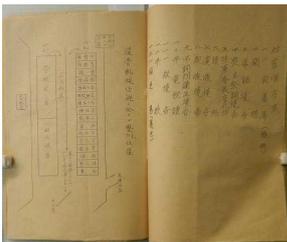
調査場所として、今回も山添村生涯学習施設 東豊館（東豊ベース）を使用させていただきました。

整理したのは、作業が途中になっていた葛尾観音寺文書と葛尾の浜田家文書、新たに借用した北野の徳谷家文書です。

葛尾観音寺文書は、寺院関係文書ばかりでなく、葛尾区の近代行政に関わる公文書が多く保管される点が特筆されます。「区長会等往復文書綴」（葛尾観音寺文書 7-20）には、1928年10月に提案された「大礼奉祝」についての行事案が見られます。大嘗祭当日、各家庭で神棚に酒食を供えて会食をしたあと、午後6時に神社に集合し、参拝の後に提灯行列をすることなどが決められていました。

また、同じ史料に綴り込まれていた1938年12月17日付けの「聯合協議会提出事項」には、戦没した軍人の「遺骨凱旋」に伴う村葬儀について、当日の次第などが詳細に記されていました。日中戦争の長期化により、多数の戦死者が出るようになっていましたが、遺骨が帰ってきた地域では、戦意高揚のために各地で児童なども動員されて慰霊祭が盛大に行われていました。山添村でも同様の行事が行われていたことがわかります。

戦後のものでは1952年8月「金輪山観音寺修理覚帳」が注目されます。この史料の冒頭に書かれた「修理顛末」によると、1921年に観音寺の大修理を行ってから、小規模の修理を重ねてきましたが、次第に傷みが見えてきたこと、とりわけ「此の度の吉野地震」によって、

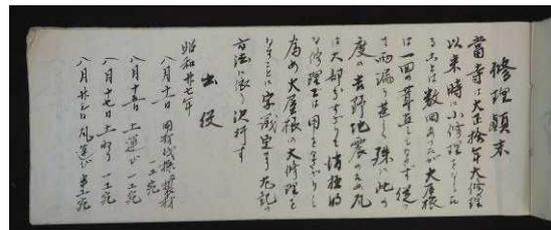


大部分の瓦が落ちてしまったために「大修理」を要することになったとありました。「吉野地震」とは、気象庁によると1952年7月18日に奈良県中部を震源とするM6.7の地震で、近畿地方では震度4

が観測されていました。この時の被害地域は広範囲に及び、奈良県内では死者が3名、住宅半壊1、一部破損が18、住宅以外の被害が7あったとされています（「昭和27年7月18日吉野地震概報」）。この時の地震では、山添村でも深刻な建物被害が出ていたことがわかります。観音寺文書には、2024年9月調査では、嘉永7年（1854）6月の伊賀上野地震によって、観音寺に大きな被害が出てたことを伝える史料も見つかっていました。こうした地域の史料から、歴史災害情報を蓄積し、被害実態を確認することは、防災について考えるうえでも貴重な手掛かりになると思われます。

一方、同じ葛尾区の浜田家文書には、弘化4年（1847）の葛尾観音寺「本堂修復寄進帳」もありました。近世から近代、そして戦後へと、地域社会の人びとによって支えられていた寺院の姿が浮かび上がります。

また、浜田家は、近世に葛尾村庄屋をつとめたのち、近代にも戸長や区長を歴任したため、明治以降の公文書も多数残されています。1877年の葛尾村「諸書類引渡目録」、1878年「鉄炮取調書」などは、浜田家が戸長を勤めていた関係で同家に残されたものでしょう。浜田潤一郎は、1956年に添上郡東山村と山辺郡波多野村・豊原村が合併して発足した山





添村の初代村長でもあり
ました。

興味深いものが、1898
年に神宮教大坂兵庫両本
部長から浜田熊次郎宛て
て出された神宮大麻配布
についての依頼状です。神宮教は、伊勢講を
母体として 1882 年に成立した教派神道の一
つです。神宮教は、1882 年に伊勢神宮から
布教活動を担っていた神宮教院が分離して教
派神道となりました。それ以降、江戸時代は
伊勢御師が行っていた神宮大麻と伊勢暦の配
布を担いました。依頼状から、神宮教が地域
の名望家を窓口にして大麻配布を行っていた
ことがわかります。翌年の 1899 年に神宮教
は神宮奉祭会に改組されます。

また、明治政府が神道を国民教化の手段と
して利用していたこともあり、神宮大麻の配
布には役場が関与します。1906 年には、波
多野村役場から葛尾惣代にあてて大麻 4、伊
勢暦 2、御供 4 の頒布と初穂の提出を求める
文書も届けられています。

浜田家文書のなかには、葛尾のものではな
く、どういう経緯で収蔵されたものか明らか
にできませんが、菅生村・西鶴山村の宗門改
帳(明和 4 年「和州山辺郡菅生村宗旨御改帳」
・西鶴山村「宗旨御改帳」)が確認できまし
た。これまでの調査では、山添村内で宗門改
帳はなぜか一つも確認できてなかったのも、
貴重なものといえます。

北野の徳谷家文書は、今回から整理が始ま
ったものです。近世の年貢銀の「通」がまと
まって残されていたのが特徴的です。湿気で
貼り付いてしまっているもの、破損が激しい
ものも多数あり、今回は慎重に古文書を取り
出し、清掃することから作業を始めました。

徳谷家文書の整理は始まったばかりです
が、目をひいたのが「与力」についての記載
です。与力とは、大和高原地域で見られる民



俗慣行で、家と家が
「与力関係」を結び、
冠婚葬祭など生活の
場で互いに協力しあ
うというものです。

2025 年 3 月の調査
では浜田家文書の貞



享 5 年(1688)10 月 2 日「永代売渡し申田
地之事」に売主・弟と並んで「よりき」2 名
が署名していたことが確認され、与力の存在
が 17 世紀まで遡ることがわかっていたが、
その後の関連史料はほとんどが 19 世紀
のものでした。ところが、今回の徳谷家文書
には享保 12 年(1727)閏正月「売り渡し申
田地之事」、同年 12 月 25 日「売り渡し申
田地之事」、安永元年(1772)12 月 29 日「流
シ申田地之事」など 18 世紀の与力関係史料
を複数確認できました。

なお、徳谷家文書が収納されていた箱には
タマムシが入っていました。タマムシは縁起
物とされたり、タンスに入れておくと着物が
増えるという俗信がありました(鈴木棠三『日
本俗信辞典動物編』)。さらに転じて、「タマ
ムシは防虫効果がある」とされることもある
ようです。徳谷家文書と一緒にタマムシが入
れられていたのも防虫効果を期待したものだ
ったのかもしれませんが。

今回も日帰りのため作業時間は少なくなり
ましたが、参加学生のみなさんの努力により、
調査は順調に進捗しました。

葛尾観音寺文書は、作業途中だった箱 7 と
箱 8 の作業を終え、総計 35 点。浜田家文書
は作業途中だった箱 1 と箱 2～4、188 点(箱
4 は作業途中)。徳谷家文書は作業途中です
が 108 点。2 日間で合計 331 点のカードをと
ることができました。

調査参加者は、本学学生有志延べ 25 名(21
日は 11 名、22 日は 14 名)です。こうした
古文書の整理作業は初めてという 1 年次生の
参加もありました。

教員は、奥本武裕、河内将芳、木下光生、
森川正則、村上紀夫の 5 名があたりました。

山添村での調査は今後も継続していきたい
と考えています。調査にあたって便宜を図っ
て下さったご所蔵者と山添村教育委員会の皆
様にお礼申し上げます。